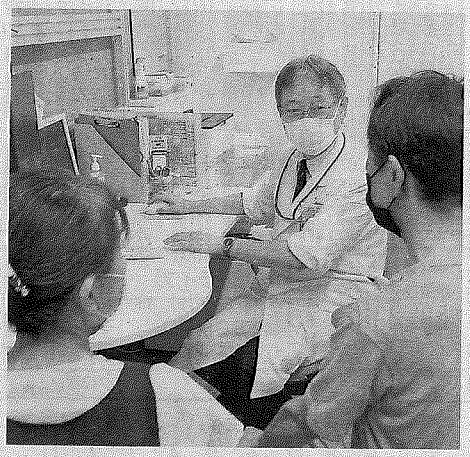
遺伝子検査でリスク判断

アルツハイマー病の新薬・レカネマブに続き、同様に原因物質を脳内から除去するタイプのドナネマブが早ければ年内にも医療現場で使われる。期待が高まる一方で、いずれも脳への副作用が懸念されており、治療を望む患者への適切な情報提供が求められる。

「使われ始めたばかりの薬。慎重に考えたい」。愛知県の公務員の男性(56)は妻(52)と話し合い、レカネマブの治療をすぐには受けないことにした。

男性は2020年夏頃から家族に同じ質問を繰り返すようになり、近所の病院で受けた検査で海馬の萎縮が判明した。職場でミスが続き、21年春に認知症の前段階の軽度認知障害(MCI)と診断された。その後、国立長寿医療研究センター(愛知県大府市)に定期的に通い始めた。

妻はレカネマブに期待を寄せていたが、副作用などの情報を知り、ためらいを感じていた。臨床試験で脳の浮腫や微小出血の副作用が一定程度報告され、薬との因果関係が否定できない死亡例もあった。仕事も車の運転もこなす男性の姿に、「万一重い副作用が出たら安定した生活が壊れる」と考えたからだ。



武田さん(奥)の診察を受ける男性(右)。朝夕のウォーキングも欠かさず、「悪くなるのを少しでも遅らせたい」と話す(愛知県大府市で)

副作用は、脂質代謝を担う「アポリポたんぱくE(アポE)」の遺伝子の型が関係している。この遺伝子は両親から一つずつ受け継ぎ、3種類のうち「4型」を持つ人はリスクが高い。レカネマブの臨床試験では脳の浮腫の発生頻度は4型を持たない人が5・4%に対し、一つでは10・9%、二つでは32・6%だった。

米国の指針では遺伝子検査で事前にリスクを確認するよう推奨しているが、この検査は日本で公的医療保険が認められていない。同センターは研究の一環で検査を行い、レカネマブ治療を検討する人のうち希望者に結果を伝える。9月上旬までに結果を知った23人のうち4型を持たない10人全員が治療を始めた。一つを持つ11人のうち治療に進んだのは8人、二つを持つ2人は治療を見送った。

男性も4型が一つあり、治療を急がないことにした。食事や睡眠に気をつけ、会社では管理職から慣れた業務への配転も認められた。「できるだけのことを無理なく続けたい」と語る。

アポEの4型を持つ人はアルツハイマー病の発症リスクが高いとされ、子や孫への遺伝的影響もある。検査結果を知らせる場合には家族への丁寧な説明も必要だが、認知症診療を担う医療機関の多くは遺伝カウンセリングの体制が十分ではないという。同センターも忘れセンター長の武田章敬さんはカウンセリングの重要性を強調した上で「新薬の治療を検討する判断材料として、一刻も早くこの検査が保険診療で行えることが望ましい」と話す。